正岡子規

芥川龍之介

×

北原(きたはら)さん。

「アルス新聞」に子規(しき)のことを書けと云ふ仰(あふ)せは確(たしか)に拝誦しました。子規のことは仰せを受けずとも書きたいと思つてゐるのですが、今は用の多い為に到底(たうてい)書いてゐる暇(ひま)はありません。が、何(なん)でも書けと云はれるなら、子規に関する夏目(なつめ)先生や大塚(おほつか)先生の談片を紹介しませう。これは子規を愛する人人には間(ま)に合せの子規論を聞かせられるよりも興味のあることと思ひますから。

×

「墨汁一滴（ぼくじふいつてき）」だか「病牀六尺（びやうしやう）」だかどちらだかはつきり覚えてゐません。しかし子規（しき）はどちらかの中に夏目先生と散歩に出たら、先生の稲を知らないのに驚いたと云ふことを書いてゐます。或時この稲の話を夏目先生の前へ持ち出すと、先生は「なに、稲は知つてゐた」と云ふのです。では子規の書いたことは譃（うそ）だつたのですかと反問すると「あれも譃ぢやないがね」と云ふのです。知らなかつたと云ふのもほんたうなら、知

つてゐたと云ふのもほんたうと云ふのはどうも少し可笑(をか)しいでせう。が、先生自身の説明によると、「僕も稲から米のとれる位のことはとうの昔に知つてゐたさ。それから田圃(たんぼ)に生える稲も度(たび)たび見たことはあるのだがね。唯その田圃(たんぼ)に生えてゐる稲は米のとれる稲だと云ふことを発見することが出来なかつたのだ。つまり頭の中にある稲と眼の前にある稲との二つをアイデンテイフアイすることが出来なかつたのだがね。だから正岡(まさをか)の書いたことは一概(いちがい)に譃とも云はなければ、一概にほんたうとも云はれないさ」！

それから又夏目先生の話に子規（しき）は先生の俳句や漢詩にいつも批評を加へたさうです。先生は勿論（もちろん）子規の自負心（じふしん）を多少業腹（ごふはら）に思つたのでせう。或時英文を作つて見せると――子規はどうしたと思ひますか？　恬然（てんぜん）とその上にかう書いたさうです。――ヴエリイ・グツド！

これは大塚先生の話です。先生は帰朝後西洋服と日本服との美醜を比較した講演か何かしたさうです。すると直接先生から聞いたかそれとも講演の筆記を読んだか、兎に角その説を知つた子規は大塚先生にかう云つたさうです。――

「君は人間の立つてゐる時の服装の美醜ばかり論じてゐる。坐つてゐる時の服装の美醜も幷せて考へて見なければいかん。」わたしのこの話を聞いたのは大塚先生の美学の講義に出席してゐた時のことですが、先生はにやにや笑ひながら「それも後に考へて見ると、子規はあの通り寝てゐたですから、坐つた人間ばかり見

てゐたのでせうし、わたしは又外国にゐたのですから、坐らない人間ばかり見てゐましたし」と御尤（ごもつと）もな註釈をもつけ加へたものです。

ではこれで御免蒙（ごめんかうむ）ります。それからこの間（あひだ）お出（いで）になつた方にもちよつと申し上げて置いたのですが、どうか「子規全集」の予約者の中にわたしの名前を加へて置いて下さい。以上。

（大正十三年四月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。